

# 日本書史

石川 九 楊 著

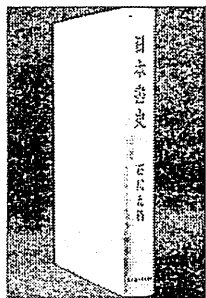
千年をさかのぼる過去の人物の筆触は残る。その力動相の変容を追跡すれば、書する知識人の意識と下意識の歴史的展開は明らかにで出きる。これが『中国書史』に続く、著者の基本姿勢だ。かくて書は政治や文学よりも直截(せつ)に精神史を解き明かすかきとなる。

書は文字を媒体として言葉に形を授け、文字や言葉の生成変容を促す。だが逆に言葉と文字なくしては、書は現象しえない。

この相互依存は、思考と文字とを切断する構造主義言語学へ

の根本的批判とも映る。だがフラムリオン書店の近著『エクリチュールの歴史』は、表意文字の支持体の議論の出発点とし、石川の方法論に同意する。

書に固有の特性を純粹抽出する姿勢は、モダニズム美学に通じ、厳密な形式分析を加える姿



## 文字刻む歴史の相貌

勢は、記号学の遺産の活性化だ。その上で『日本書史』の描く列島の文字体験は、自律的展開の欠如によって特徴づけられる。

中国文化圏の周辺に位置し、石を刻む篆(てん) 刻を知らぬまま、いきなり楷・行・草の毛筆書史に「途中乗車」した。そして近代は、知識人の書の喪失とともに「途中下車」の終局を迎える。その間十三世紀の転変を、

本文七十七章は縦横に図示・細説する。日本語は、漢字文化に吸引され、寄生して、漢語の裏に和語を貼(は)り付けることで成立した。その上で、日本の書は「女手(平仮名)」を創出し、漢字の天地・縦横の秩序から、分ち書き、散らし書きへとほすかに逸脱し、藤原俊成

・定家親子に及び「角度筆」へと個性化した。

中国本流への違和感の滲(にじ)む空海の「奇怪の雜書体」は、雪舟の『天の橋立図』の運筆様式の混交にも通じよう。また流儀化できぬ定家を流儀にした徳川時代書道の墮落は、家元一般の形骸(がいかい)的伝承の典型か。構築忌避のけだるい間合いと和風化という「女性」化。

和―漢の別が私―公、女―男の別と重なる日本文化の二重構造。次ぎに問われるべきはその近代における変容となる。

編集者、橋宗吾の政(ぼつ)文も秀抜。

(名古屋大学出版会、一五〇〇〇円)

稲賀繁美・国際日本文化研究センター助教